

『ナルチスとゴルトムント』 における精神と官能の融和の問題

——精神分析の影響を中心に——

横 田 一 哉

1930年に成立したヘッセの小説『ナルチスとゴルトムント』において、ヘッセは自己の精神的な要素をナルチスに、そして、自己の官能的、芸術家的要素をゴルトムントに具現化している。ヘッセは1931年クリストフ・シュレムプに宛てて次のように記している。

ゴルトムントはナルチスと一緒にあって、或いは、ナルチスと関係することによって、初めて完全なものとなります。同様に私、芸術家ヘッセも、精神や思索や規律や、その上道徳さえも尊敬するヘッセによって——補われることが必要なのです⁽¹⁾。

主人公の内面において対立する要素を、お互いに補い合わせ融和させることによって、自己を発見し、確立することは、ヘッセの後期の作品の一貫したテーマとなっている。『ナルチスとゴルトムント』においても同じ問題が、精神と官能の対立というかたちでテーマ化されている。しかし、この作品で特に注目すべきことは、ゴルトムントの内面に生じる人類の母イヴの像である。このイヴの像は、ゴルトムントが人生を体験するにつれ変化していくのであるが、ヘッセは自身をナルチスとゴルトムントに仮託し、如何にして自己の内面の対立という問題を解決しようとしたのであろうか。そのことを、ゴルトムントの内面に生じる、人類の母イヴの像の変化のプロセスに着目しながら考察していくのが、本小論文の狙いである。

ゴルトムントの父は、汚辱にまみれた母方の素姓を素因とする、息子の負い目を償わせる為、彼を修道院に拘束した。ゴルトムントが修道院で学ぶことは、元来父の意図によるものであったが、知らず知らずのうちにゴルトムントの自発的な意志となっていく。しかし、ゴルトムントは既成の教えからは何も学ぶことはできず、自己自身の内面を探究し、真の自己を見い出さねばならなくなった。主人公のこのような自己探究の方法は、1919年に成立した『デミアン』のはしがきの以下のくだりに既に集約されていた。

総ての人間の生活は、自分自身への道で——めいめい自分自身になろうと努めている。——我々総てのものの出所、すなわち母は共通である。我々はみんな同じ深淵から出ているのだ。——我々は互いに理解することは出来る。しかし、めいめいは自分自身しか解き明かすことができない⁽²⁾。

真の自己を知るには、自身で解き明かすしか方法はない。その為にはまず、既成の教育によって植え付けられた先入観を除去した上で、本来の自己を探究せねばならない。従って、ゴルトムントも父と修道院から解放されねば、自己の本来の道は見えてこない。この手助けを行ったのが、修道院の見習い僧ナルチスであった。

ナルチスには、正反対であったにもかかわらず、深く理解していたゴルトムントの性質がよく見えた。それは彼自身の性質の別な、なくしてしまった半分であったからだ。——その性質が思いあがりや、教育の誤りや、父の言葉等の固い殻に包まれているのを彼は見、この若い生命のこみ入ってはいけない秘密をすっかりずっと前から察知していた。彼の任務は明らかだった。それはつまり、この秘密をその当人に暴露してやり、その殻から解放してやり、本来の性質を取り戻してやることだった。(34)

ゴルトムントが彼本来の性質を取り戻す為に、ナルチスはゴルトムントと様々

な対話をかわすのだが、次の部分に大きな進展が見てとれるであろう。ナルチスはゴルトムントに「君は自分の幼年時代を忘れてしまった」(48)と指摘したのに対し、ゴルトムントは矢をさされたように愕然とする。彼の心の中の秘密は、ナルチスのその言葉により覚醒されたのだった。その後、ゴルトムントの幼い頃に姿を消した彼の母の記憶がよみ返った。このことを契機として、ゴルトムントの内面は、父のように既成の教えしか行っていない修道院から解放され、母性的なものに目覚めはじめる。ゴルトムントはナルチスに以下のように語っている。

僕は精神や学問に対し、父に対するのと同じようなぐあいです。つまり、僕は父を非常に愛し、父に似ていると思っていました。父の言ったことをすべて絶対に信じていました。だが、母がふたたび現われると、はじめて僕は、愛とは何かということを知りました。母の姿と並ぶと、父の姿は急に小さく不快に、いとわしくさえなりました。今僕はいっさいの精神的なものを、父性的なもの、非母性的なもの、母性に敵対するものと見なし、それをいささか軽視するほうに傾いています。(66-67)

また、ナルチスが「君の道は君を母の所へ連れ戻し始めた。——君はいったい父の所へ帰りたいと思うかい」(68)と尋ねたのに対し、ゴルトムントは「いいえ、ナルチス、決してそんなことはありません」(68)と答えている。ナルチスはゴルトムントと対話することにより、父により抹消されていたゴルトムントの母の記憶を呼びさますことに初めて成功したのであるが、ここにおいて、対話により潜在意識にあったものを呼びさます方法が用いられている。この対話には、ヘッセが精神分析を受けた時の影響が看取されるのである。ヘッセは第一次大戦中、非戦論をとなえ自国から裏切り者扱いされ、また、妻との離別等により、重いノイローゼにかかってしまった。そこで彼は、J. B. ラングのもとで精神分析を受け、さらには、1921年にC. G. ユングの精神分析をも受けている。ヘッセは1919年エーミル・モルトに宛てた手紙の中で「心理

学への没頭において私が体験したことは、文学的に表現される」⁽³⁾と語っているように、以来精神分析の体験は彼の作品に取り入れられるようになり、以下のような認識を持つに至っている。

我々がまさに非常にうまく我々の中へ押しのけたものを、——認識し、調べはじめにとることを精神分析は我々に教えます⁽⁴⁾。

我々は少なくとも一度あらゆる価値判断を捨て去り、現在あるがままの自分自身をみすえねばならない。すなわち、道徳や高潔な心やあらゆる美しい外観なしに、我々のむきだしの衝動や希望や不安や苦難において、意識されないものが表われ出ることによって我々に示されるような自分自身を見すえねばならない⁽⁵⁾。

『ナルチスとゴルトムント』においては対話によりゴルトムントの潜在意識を浮上させる一種の精神分析的手法を用いた。そのことにより、自己自身に植え付けられていた価値判断をゴルトムントに捨てさせ、彼の内奥に極めて巧みに押しのけられ、閉じ込められていた記憶を呼び起こすことに成功した。ここには、ヘッセが精神分析において認識した先述の内容が語られている。また、この精神分析的対話を通して、父により無理に敷かれた道ではなく、自己の内心の促しに即した本来の彼自身の道がゴルトムントに開かれた。しかし、その道はナルチスには全く未知なものである為、ナルチスはこれ以上ゴルトムントを導くことはできなくなる。以来、ゴルトムントは自己の内心の声にのみ耳を傾け始める。「ゴルトムントは——内心の流れや声にのみ身をゆだね、自分のうちに沈潜して総てを忘れることができた。その響きはみな母の声のように響き、その無数の目はみな母の目であった」(74)。内心の声に耳を傾け、その声に従っていくということは、「母」の声に耳を傾け、自身を解き明かす道を歩むことを意味していた。そして、その道は先程引用した『デミアン』のはしがきにも記されていたように、人類の母へと通じていると言って差し支えない

だろう。

ゴルトムントは修道院を去り、自身の内心の声に従い放浪生活に入る。放浪生活で彼は多くの女性と愛のたわむれを経験したり、農村で知り合ったヴィクトルに金貨を盗まれそうになり、彼を殺してしまったりした。このような放浪生活の中でゴルトムントは、愛する者や死にゆく者の身振りや表情が、肉欲の満足の身振りや表情に似ていることを察知し、そのような表情が自己の内にも存在することを認識するようになった。また、彼は放浪生活で様々な体験を重ねる間、しきりに夢を見ている。人類の母イヴが夢に現れることもよくあった。ちなみにヘッセが精神分析から得た独自の認識について以下のようにそれぞれ述べている。

私は自身に混沌を受け入れることを要求する。このことは精神分析が要求していることです⁽⁶⁾。

精神分析に持ちこたえ、更に歩みつづける人は、——慣習や、昔から伝えられた考え方からより切り離されているのに気付きます。しかし、その為に彼はますます因習の崩壊する書きわりの背後に、仮借ない真実の像、自然の像が浮かび上がるのを見るか、予感します⁽⁷⁾。

分析の道、記憶、夢、連想からの魂の探究を更に進んだ人には、自身の無意識に対してのかなり親密な関係といわれうるものが、獲得物として残る。そういう人はいつもは意識下にとどまっているものや、注意されない夢においてのみおこるものから多くを明るみに持ってくる⁽⁸⁾。

以上の認識は、作品に即して次のように言いかえることができる。修道院で生活して来たゴルトムントにとっては、放浪生活で多くの女性と愛し合い、殺人を犯すはめになることとは、まさに混沌を受け入れることであり、このゴルトムントの行為は、自ら混沌を受け入れるという精神分析の要求を実践すること

にはかならない。また、ゴルトムントがこのような放浪生活を続け、しきりに夢を見ることは、彼が精神分析の道を更に歩むことに等しく、魂の探究を更に進めていくことを意味している。それにより父や修道院の教えからますます切り離され、彼の隠されていた真実の像、自然の像、つまり、ゴルトムントの潜在意識となっていた官能的な要素が、徐々に彼に浮かび上がってくるのである。彼の夢にしばしば出てくるイヴは、そのもっとも顕著な表われである。

ところで、ゴルトムントは放浪中ある修道院にとめてもらい、彫刻家ニクラウス親方のマリア像に接したとき、彼のこれまでの支離滅裂な放浪生活と、それにより生じて来た彼の内面の像に意味を与える可能性を見出し、ニクラウス親方のもとで彫刻師の修業をする決心をする。ニクラウス親方のもとで、木や石膏や絵の具を扱う術を学んだり、親方の手伝いをしている間に、彼は次のように感じはじめた。

その他にも一つ別な顔があった。それは彼の魂の中に住んではいたが、彼のものになりきってはならず、いつかとらえて芸術家として表現したいと熱望しているのに、たえずどこかに雲がくれしてしまうのだった。それは母の顔だった。この顔は、かつてナルチスとの対話の後で、消えてしまった記憶の底から再び現われたのと同じ顔ではもうとっくになくなっていた。さすらいの日々と愛の夜々のうちに、あこがれと生命の危険と死に親しんだ時の間に、母の顔は徐々に変化し、豊かになり、より深く、より複雑になった。それはもはや彼自身の母の像ではなく、その表情と色とが、次第にもはや個人的でない母の像に、つまり、人類の母であるイヴの像になった。(167-168)

ゴルトムントの内面の像は、再び母の像として現れるが、ナルチスにより目覚めさせられた母の像ではもはやない。ゴルトムントの潜在意識が体験や夢によって目覚めるに従い、母の像は豊かになり、人類の母イヴの像へと変身していった。そして、ゴルトムントはそのイヴの像を彫刻したいという希望を抱きは

じめる。

その後、ゴルトムントは親方のもとの修行中に、ナルチスをモデルにしたヨハネ像を完成する。その像についてのゴルトムントの思いは、次のくんだりから見て取れる。

生命の父親ゆずりの面，すなわち精神や意志は，彼のふるさとはなかった。そこは，ナルチスがその家とするところであった。——それを彼はヨハネの像にも刻みこみ，形にあらわした。(174)

ゴルトムントの官能的性質の象徴であるイヴの像が，彼の内面で豊かになって行くにつれて，彼のヨハネ像の素地となったもの，つまり，ナルチスが本領とするところの精神は，本来彼自身にそなわったものではなく，ナルチスから手に入れたものだということをゴルトムントは実感し始める。

ヨハネ像を作り上げてから，ゴルトムントは更なる放浪生活を重ねた後ナルチスと再会する。その時，彼の様々な体験は彼の内面で熟し始め，芸術を新しい目でみるようになってきた。それは以下のナルチスとの対話から察知される。

ゴルトムント：芸術が僕にもたらしたものは無常の克服だった。人間生活の道化と死の舞踏からあるものが残り，生きのびるのを僕は知った。(276)

ナルチス：芸術の本領は——死滅するものを死から奪い取って，よりながく存続させる点にだけあるのではない，と私は思う。(276)

ゴルトムント：よい芸術品の原型は実存の人物ではない。実存の人物はそのきっかけになるかもしれないとしても。——原型は肉と血ではなく，精神的だ。それは芸術家の魂の中にふるさとを持っている像だ。僕の中にも

ナルチスよ、そういう像が生きている。僕はそれをいつか表現して君に見せたいと思う。(276-277)

ナルチス：君はアイデアと原型に身をささげることを告白することによって、精神的な世界に、我々哲学者と神学者の世界にはいり込み、生活の混乱した苦痛のただ中に——創造的精神が存在していることを認める。——君が少年として私の所に来た時から私はたえず君の内部のその精神に訴えてきたのだよ。その精神は君の場合は思索家の精神ではなくて、芸術家の精神だ、だが、それは精神だ。感覚の世界の濁った混迷から快楽と絶望との間の永遠のブランコから脱け出る道を君に示すものだ。(277)

ゴルトムントは、精神の世界を離れ、俗世で様々な体験をして自己の中の「母」の要素を覚醒することによって、感覚の世界の様々な要素を自己の中に見い出した。その感覚の世界は精神を欠いていて、無秩序なものであった。それ故、その世界でのみ生きるならば、快楽と絶望の繰り返しを体験せねばならなかった。しかし、ゴルトムントはヨハネ像を作った後、再び放浪生活をはじめ、更に体験を重ねた結果、彼の内面には以下のような発展が見られた。彼の潜在意識は更に浮上し、彼は自己の中に精神が存在するのを感じはじめる。精神により、無秩序な「母」の感覚の世界が秩序づけられ、快楽と絶望の両極が融和され、快楽と絶望との間の永遠の往復運動から脱け出る可能性がゴルトムントに示されてきたのである。

ここで、『ナルチスとゴルトムント』と同様、自己の探究と同時に、人類の母に通じる道を歩む試みが示された作品である『デミアン』に少し目を向けよう。『デミアン』においても主人公シンクレールは自己の中に「母」の世界が存することを認識するに至るのだが、シンクレールの導き手であるオルガン奏者ピストリウスが、シンクレールに「母」なる世界を秩序づけるものに相当する力について言及している箇所がある。シンクレールは飛ぶ夢を見て恐ろしい高さに無抵抗に引き上げられたとき、呼吸の停止と放出により自分の昇降を調

節しうることを発見した。この夢に対してピストリウスは以下のように分析している。

君を飛ばせる飛躍は、誰でも持っている我々人類の大きな財産だ。——いざとなると皆不安になる。ひどく危険だからね。そこで、大抵のものはいっそ飛ぶことを断念して法規に従い歩道を歩くことにするのさ、だが君はべつだ、君は有為な青年にふさわしく飛び続けている。するとみたまえ、君は不思議なことを発見する。つまり、君はしまいにはそれを制御するようになり、君を引きさらっていく大きな普遍の力に——一つのかじが働くことを発見する。君は——呼吸調節器でやっているのだ⁽⁹⁾。

このピストリウスの夢解釈を仮に現実にあてはめれば、次のように換言できよう。自分の衝動をそのまま生きるのは危険である為、たいていの人は既成の法に従うが、シンクレールは自分の中に自分の衝動を制御するものを発見し、それを活かすことにより、自分の衝動に従って生きるか否かを判断することになる、と。ところで、このピストリウスという人物について、ヘッセは1926年バル夫妻に宛てた手紙の中で先に言及したラング博士とは『デミアン』におけるピストリウスのモデルであると言っている⁽¹⁰⁾。そのことから判断して、シンクレールとピストリウスの先述の対話は、精神分析的対話であると見做してよい。つまり、この対話はシンクレールの夢を分析することで、彼の潜在意識を無秩序な「母」の世界からより呼びさまそうとするものであり、その無秩序な「母」の世界を秩序づけるものが、シンクレールの内奥に潜んでいることを気づかせようとする手筈のものである。このシンクレールの呼吸調節器をゴルトムントの生の場合に適応すれば、ナルチスとの再会時の彼との対話により、ゴルトムントが自己の内にその存在を確信するに至った精神、すなわち、彼の内面の無秩序な「母」の世界を秩序づける精神に相当するものではないか。ヘッセは精神分析に関して、「精神分析からの効果を、実生活の中で得ることだけが、精神分析を高価なものとする⁽¹¹⁾。」と語っている。『デミアン』

において、主人公シンクレールは、この呼吸調節器を夢において垣間見たにすぎず、実生活での体験によって自己の内面で覚醒させなかったので、「母」の世界に秩序を与えることができなかった。しかし、ゴルトムントは実生活での体験により精神を目覚まし、自己の内奥に見い出した。したがって、『デミアン』において成し得なかったことを、この『ナルチスとゴルトムント』において成就する可能性が示されたと言えはしないだろうか。

さて、このようにしてゴルトムントが精神を自己の内面に見い出したことは、同時にゴルトムントのナルチスへの帰還を意味している。ゴルトムントはこれまでの自己の生活を次のように回想している。

この時ゴルトムントには自己の生活が意味を得たように、——自分の生活の三つの大きな段階、即ち、ナルチスへの依存と、それからの離脱——自由と放浪の時代——帰還と沈潜と、成熟と収穫との始まりがはっきり見えるように思われた。(277-278)

ゴルトムントがナルチスのもとを離れて、苦悩の多い俗世で放浪生活をしたときに、ゴルトムントの父の要素は消えて行き、彼は「母」への道に向かっていったように思われた。けれども、再び父なる精神はゴルトムントの内面に姿をあらわしはじめた。そして、ゴルトムントはナルチスとの再会後、彼の誘いにより芸術家として修道院で働くことになった。このゴルトムントの生活の過程、つまり、彼が精神の世界を離れ、母の像を自己の内面に見いだした後、自己の内面の精神の存在を認識するまでの過程は、1943年ある友へ宛てたヘッセの手紙の中の以下の定義によって総括されはしないだろうか。

善なる父は我々から悩みの中で、恐らく繰り返し消えて行き、我々の道は永遠の偉大な仮借ない母へ至らねばならない。しかし、我々がたとえ母なる大自然を人生、或いは悩みと呼ぼうが、我々の本性は両極であり、精神と自然との間で選択する余地はないので、母なる大自然は我々の中で反対

者として、その都度再び父を要求する⁽¹²⁾。

以上のようにして生じてきたゴルトムントの内面の像を、芸術家として表現するのが彼に残された終生の課題となってきた。以前ゴルトムントは、次のように予感していた。

本物のまぎれもない芸術家の作品は、ある男性的で女性的なものを、本能的なものと同様な精神性を同時に持っていた。だが、もしゴルトムントが人類の母イヴの像を作ることについて成功したら、それはあの二重の顔を最もよく表わすであろう。(175)

もしゴルトムントがイヴの像を完成させることが出来れば、精神により秩序づけられた「母」の像が、つまり彼が以前予感していたような本能的なものと、精神的なものを同時に兼ね備えた本物の芸術家の作品が完成するであろう。しかしながら、その後ゴルトムントは修道院を離れ、またもや放浪生活をし、罪を犯し、女を誘惑する生活を送る。このように彼の内面は精神と官能の融和を常に維持できるわけではなかった。イヴの像はゴルトムントの身に完全に備わったものではなかった。それ故、それを彼が芸術に表現することは、真の意味でイヴの像を作ることにはならない。また、本当に自分が体得したことだけを作品に表現するというヘッセの信条からすれば、ゴルトムントはイヴの像を作ることができない。従って、ゴルトムントは死ぬ間際にナルチスに「僕がイヴの神秘をあらわにすることを彼女は欲しない」(319)と言わねばならなかった。けれども、ゴルトムントは死に直面したとき、「母」へ至る道を見出すことができた。ゴルトムントは修道院を離れた後、以前放浪生活時代に知り合った美しい女性アグネスに再会するが、彼は年をとりすぎていて、もはや彼女には相手にされなかった。ゴルトムントは失望して馬に乗っているとき、谷間を小川の中へ落ち肋骨を折り、死なねばならないと知った。その時彼はもはや死にさからわず、死に身を委ねた。そして、彼の心臓を「母」が取り出そうと

するのを彼は感じていた。ゴルトムントはこの世にもはや執着せず、死に身を委ねた時、再び「母」が姿をあらわすのである。以前ゴルトムントは、多くの人々がベストで死んでいる町を放浪していた際、ある芸術家の黒死病について見たものから学び取った絵を目にしたことがある。その時彼は死に対し、「死に神の狂暴な歌は——誘惑的にふるさとへ誘うように、母のような響きを発していた。——死は母——であった」(227)という思いを持っていた。また、彼は自己の死を前にした時、死について「僕が死に興味を持っているのは、自分は母への途上にあるということがいつも変わらず僕の信仰、或いは、夢であるからにすぎない」(316)とも語っている。ゴルトムントにとって、死は母へたどり着くもう一つの道を意味していた。ゴルトムントが死ぬ時点には、彼の抱いていた「母」の像は精神と官能が融和されたものに高められていた。したがって、死は精神と官能が融和された世界に至る通路となっていたと言えるかもしれないだろうか。この問題の考察は別の機会にゆずりたい。

使用したテキスト

Hermann Hesse: *Narziss und Goldmund*. Frankfurt am Main 1975. ここより

の引用は、本文中のその引用箇所後に、ページ数を記することとした。

翻訳は『知と愛』(新潮文庫 高橋健二 訳)を参照した。

注

- (1) Hermann Hesse *Werk und Wirkungsgeschichte*. Frankfurt am Main 1985. S. 158
- (2) Hermann Hesse: *Demian*. Frankfurt am Main 1974. S. 8
- (3) Materialien zu Hermann Hesse >Demian<. 1993. S. 139
- (4) Hermann Hesse *Lesebuch*. Frankfurt am Main 1992. S. 238
- (5) Über Hermann Hesse *Zweiter Band*. Frankfurt am Main 1977. S. 406
- (6) ebd. S. 406
- (7) Hermann Hesse *Lesebuch*. S. 238
- (8) ebd. S. 237
- (9) Hermann Hesse: *Demian*. S. 106-107
- (10) Materialien zu Hermann Hesse >Der Steppenwolf<. Frankfurt am Main

1972. S. 63

- (11) Materialien zu Hermann Hesses >Siddhartha<. Frankfurt am Main 1972.
S. 136

- (12) Hermann Hesse Ausgewählte Briefe. Frankfurt am Main 1974. S. 201

——大学院文学研究科研究員——